

農業、治水や生物多様性の脅威となるナガエツルノゲイトウ

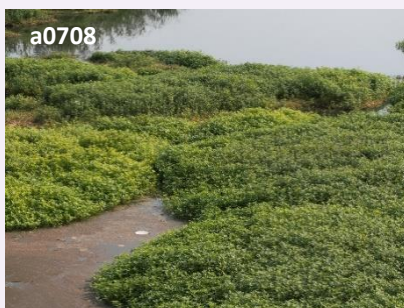
南米原産の特定外来生物ナガエツルノゲイトウ（以降、ナガエ）が千葉県内で分布を拡大し、農業、治水や生物多様性への脅威となっています。千葉県では印旛沼流域を中心にナガエの防除対策を展開していますが、分布拡大に歯止めがかかっておらず、被害の拡大が懸念されています。今号では、ナガエの見分け方や侵入状況、根絶を困難にさせる生態的特徴等を紹介していきます。写真左上は撮影者の団員番号です。

ナガエツルノゲイトウ *Alternanthera philoxeroides*

特定外来生物



葉は楕円形で縁には細かい鋸歯があり、白色で球状の花を咲かせます。茎や根の断片で繁殖し、長さ1cm程度でも再生することができます。茎の中心は空洞で、ちぎれやすくなっています。水面を覆うことで水中への光の透過を妨げる等、在来種の生息環境を改変します。



たびたび群落化し、水面を覆うことで船舶の通行を妨げ、漁業や水力発電への障害となります。また、豪雨の際に群落ごと流出し、排水機場の取水口をふさぐことで、洪水を引き起こす恐れがある等、治水への影響が問題視されています。



水路や水田、周辺の陸域にも侵入します。水田内で繁茂し、稲に覆いかぶさることで収穫量が減少します。また、農作業車に詰まるなどして、収穫作業にも影響を及ぼします。さらに、陸地でも生育できることから、水生生物だけでなく陸生生物にも影響を与える恐れがあります。

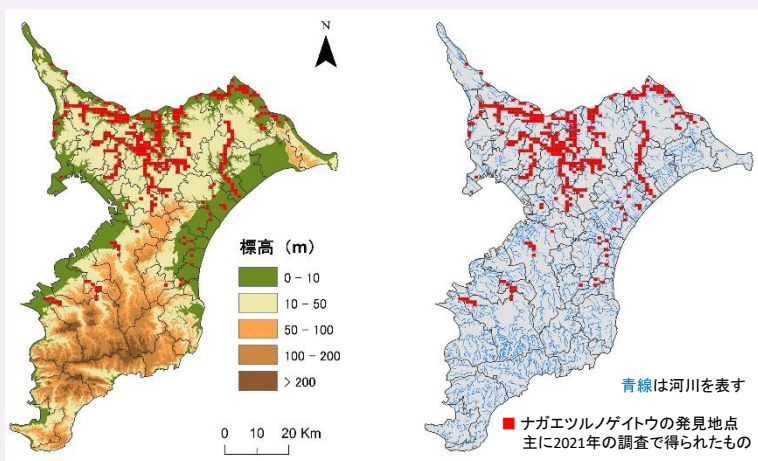


図. ナガエツルノゲイトウの報告地点と標高、河川図との関連

もし、河川や湖沼、水田や陸域でナガエを見かけた際は、是非ともご報告ください。団員の皆さんと一丸となって、千葉県内で分布拡大中のナガエの**侵入最前線**を明らかにしていきましょう！

千葉県内でナガエが発見された地点を3次メッシュ単位（1km×1kmの格子）で整理し、地図化しました（当センターのホームページで公開中の図を一部改変したもの、主要なデータは千葉県立中央博物館の林紀男氏より提供）。図から分かるように、県北部の北総地域を中心に広く分布を拡大させており、県南部の一部範囲にも既に侵入していることがわかります。

ナガエは主に河川や湖沼に生育する水草のため、発見地点は河川や湖沼に沿った線状になっています。茎や根の断片から再生することができるため、水の流れに沿って分布を拡大していると思われます。また、排水ポンプを通して、水田やその周辺の陸域にも分布拡大していると考えられています。

このように、今後も更なる分布拡大の恐れがあることから、定着地における徹底した防除対策に加え、侵入初期地域を早期に見出し、それらの地域においても早急な防除対策を実施することが望まれます。侵入最前線を把握するためには、ナガエの侵入を早期に捉える数多くの目が必要です。そのため、生命のにぎわい調査団員の皆様からのご報告をお願いいたします。

古典文学と里山の生き物たちの世界



第二十一回 ゲンジボタル

Luciola cruciata ホタル科

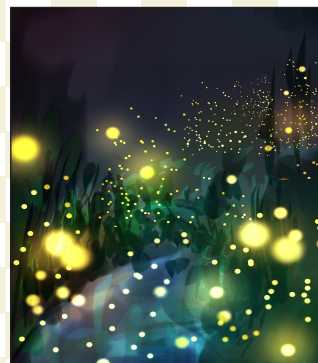
詩人 大島 健夫

日本の古典文学には、様々な生き物たちが様々な形で登場します。かつてこの国の人々はどのように生き物とかかわり、その姿に何をしていたのでしょうか。この連載では、生物多様性センターに勤務している、ポエトリー・スラム W 杯日本代表詩人の大島健夫が、^{いのち}生命のにぎわい調査団の皆様を過去の世界にご案内します。

平安時代中期を代表する女流歌人のひとり・和泉式部^{いずみしきぶ}は、源氏物語の作者として知られる紫式部とは文通を繰り返す仲でした。『紫式部日記』には、和泉式部の人物像について、「けしからぬ方こそあれ。うちとけて文走り書きたるに、そのかたの才ある人、はかない言葉のにほひも見え侍るめり」と論評されています。「人間的にはダメだが、文章の才能は言葉の端々からも感じ取れるようだ」というのです。

紫式部^{さんたく}というのは付度^{そんたく}ということをしてしない人で、同じ紫式部日記の中では、例えば清少納言についてさえ「偉そうな顔をして、大したこともないくせにインテリぶっている嫌な女だ。きつとろくな末路を迎えないだろう」などときき下ろしているのですが、和泉式部の文才については認めるところがあったようです。

和泉式部は奔放な私生活で知られており、時の最高権力者・藤原道長にも「浮かれ女」と評されています。生涯のほとんどにわたって様々な人物と恋愛を繰り返して、前例にとらわれない情熱的な恋の歌を多数残した彼女が、京都の貴船神社で詠んだ夏のホタルに関する歌が『後拾遺集』に収録されています。



画 齋藤倫瑠

物思へば 沢の蛍も我が身より ^{あくが}憧れ出づる ^{たま}魂かとぞ見る

沢で光るホタルということは、おそらくこのホタルは清流で発生して黄緑色の光を放つ、日本を代表するホタルであるゲンジボタルであったことでしょう。千葉県内の年配の方から、大正年間には川沿いがホタルの光でずっと明るく、灯火がなくても歩けたという話を聞いたことがあります。農業も河川改修もなかった昔には、現代からは想像もつかない数のホタルが生息していたのです。ましてや和泉式部がこの歌を詠んだのは平安時代。どれほどおびただしいホタルが光っていたことでしょうか。恋に焦がれる時、まるで沢のホタルたちは自分の中からあふれ出る魂のように感じられる、というこの歌には、自由に生きた天才歌人・和泉式部の魅力が詰まっています。

<これからの季節に観察できる生きもの>

- 調査対象種：セミの仲間、ヒガシニホントカゲ、カワセミ、サワガニなど
 - 調査対象種以外
 - * 渡りのシギ・チドリ類、サシバなどの猛禽類
 - * 各種昆虫、両生類、爬虫類など
 - * 希少生物（生息地・生息数が減少している生物）、外来生物の報告も受け付けています。
- 調査対象種以外は種の確認が難しいため、できるだけ写真の添付をお願いします。

<千葉県内で分布拡大中の外来種>

東南アジア原産の外来種キマダラカメムシの目撃情報が増えています。2cmほどの大きさで、木の幹から吸汁する昆虫です。生物多様性への影響、樹木の食害や人的被害等は知られていませんが、今後、爆発的な増加をすると、影響が出てくるかもしれません。そこで、侵入最前線を把握するために、発見された際は是非ともご報告ください。

* どちらも写真撮影は調査団員（団員番号：a0963）です。

